あなたを友と呼びます　　ヨハネ 15:13～15

宮本武蔵は『五輪の書』というものを書いて、その中で「神仏は敬して頼らず。」ということばを残しています。「神や仏は、敬いこそすれ、決して心をゆるして頼るものではない。頼れるのは、自分の腕だけである。」という意味です。このことばは、日本人の宗教観をよく表わしていると思います。信仰とは本来、神に愛され、神を愛することであり、信仰を深めるとは、神との関係を深めることであるはずです。改めて私にとってキリストはどういうお方であるのでしょうか。キリストを尊敬しているが頼るのは自分自身の力と言うなら、宮本武蔵と同じです。聖書は、神と神を信じる者たちとの関係、キリストとクリスチャンとの関係がどんなものかを、さまざまな比喩を使って、わかりやすく描いています。それを知ることによって、私たちも神との関係を見直し、さらに深めることが出来ます。それを見てゆきます。

キリストとクリスチャンの関係は、聖書の中でさまざまに描かれていますが、ヨハネの福音書には、四つの面から、キリストとクリスチャンの関係が示されています。その第一は、「花婿」と「花嫁」の関係です。ヨハネ 3:28-30 にあります。「あなたがたこそ、『私はキリストではなく、その前に遣わされた者である。』と私が言ったことの証人です。花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」これは、キリストの先駆者となったバプテスマのヨハネのことばです。バプテスマのヨハネは、「キリストは花婿で、キリストを信じる者たちはその花嫁である。自分は、キリストでも花婿でもない。花婿の友人であって、花婿であるキリストこそ注目を浴び、栄光を受けなければならない。」と言っているのですが、キリストが花婿であり、クリスチャンが花嫁であるというのは、キリストとクリスチャンとの関係がどんなに深いものかを、みごとに言い表わしています。キリストとクリスチャンとの関係は、夫が他の誰よりも妻を愛するように、キリストがひたすらな愛でクリスチャンを愛してくださり、また、妻が他のすべてのものをさしおいて夫を愛するように、クリスチャンが献身的な愛でキリストを愛するという、愛の関係なのです。しかも聖書は、「花婿」「花嫁」という言葉を使って、キリストとクリスチャンとを新婚の夫婦として描いています。新婚の夫婦には、熟年の夫婦にはない、新鮮さというものがあります。キリストとクリスチャンが「花婿」と「花嫁」の関係に譬えられているのは、キリストに愛され、キリストを愛することの中にはいつも新鮮な喜びがあり、感動があることを教えているのです。皆さん、罪を悔い改め、救われた時のことを思い返すとそこには何とも言えない喜びがあったと思います。その時に感じた神様は変わることなく私を愛して下さっているのです。感じられないなら神が変わったのではなく私が変わってしまったからかもしれません。

第二に、キリストは羊飼いでクリスチャンは羊です。ヨハネ 10:11 と 10:14 で、キリストが「私は良い牧者です。」と言っておられるように、キリストは私たちを導き守ってくださるお方です。羊は、とても迷いやすい動物で、羊には羊飼いの導きが必要です。また、羊は、とても弱い動物で、自分を守るための角も、牙も、早く走ることのできる脚も持っていません。ですから、羊には羊飼いの守りが必要なのです。人間は、羊のように弱く、迷いやすいものですから、神に頼り、従えば良いのですが、人間は、同時に、羊のようにわがままで、自分の知恵や力を過信して、傲慢にも神に逆らい、神の牧場から飛び出してしまいました。イザヤ 53:6 にあるように、「私たちはみな、羊のようにさまよい、おののおの、自分勝手な道に向かって行った。」のです。しかし、キリストは、神のもとから迷い出でいる者たちを、神の牧場に連れ戻す羊飼いとなってくださいました。

しかし、「羊飼い」と「羊」のたとえは、単に、キリストが私たちを導く者で、私たちがキリストに従う者という以上のことを教えています。イザヤ 53:6 に「私たちはみな、羊のようにさまよい、おののおの、自分勝手な道に向かって行った。」とありましたが、そのすぐ後に「しかし、主は、私たちのすべて

の咎を彼に負わせた。」とあります。これは神に逆らい、真理から迷い出た者たちのために、キリストは身代わりの刑罰を受け、十字架の苦しみを味あわれたのです。キリストは羊のために命を捨てた羊飼いです。ですから、キリストは「わたしは、良い牧者です。」と言った後、必ず「良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」ヨハネ 10:11 と言い、「わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」(ヨハネ 10:15)と言われたのです。

キリストとクリスチャンの関係をあらわす第三のものは、「ぶどうの木とその枝」というたとえです。ヨハネ 15:5 で、キリストは「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。」と言われました。このたとえは、キリストとクリスチャンの関係が、いのちの関係であり、切っても切れない関係であることを表わしています。ぶどうの枝が、ぶどうの木から養分を得て育てられるように、私たちは、キリストのいのちによって生かされています。クリスチャンにとって、キリストは、あれば良いが、なくてもかまわないというようなアクセサリーのような存在ではありません。ぶどうの枝がその幹から切り取られたら、あとは枯れてしまうだけであるように、クリスチャンから、キリストを取り去ったら、それはもはや「もぬけの殻」です。「クリスチャン」というのは、「キリストに属する者」「キリストとつながった者」という意味であって、「キリスト教信者」という意味ではないからです。クリスチャンとは、キリストの側から言えば、キリストが捕らえて離さない人のことですが、人間の側から言えば、キリストから離れては何もできないことを自覚して、キリストにくらいついて離れない人のことを言います。私たちとキリストとの関係が、このように、切っても切り離せない、いのちの関係であることを、私たちは、どれほど深く自覚しているでしょうか。

さてキリストとクリスチャンとの関係は、ヨハネの福音書の 3 章で「花婿と花嫁」、10 章で「羊飼いと羊」、15：5 で「ぶどうの木とその枝」として描かれていました。どれも、キリストとクリスチャンとの親密な関係を表わしていますが、ヨハネの福音書には、もうひとつのたとえがあります。「友としての関係」です。今日のヨハネ 15:15 に「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」とあるように、キリストがクリスチャンの「友」であり、クリスチャンもまたキリストの「友」であるというものです。ここで使われている「友」は、たんなる知り合いでも、「お友だち」でもなく、どんなことでも打ち明けることのできる「親友」という意味で使われています。キリストが私たちの「友」であるということは、とても心強いことで、いろんな機会にキリストが「友」であることを感じながら、信仰の歩みをされてきた方が多いと思います。

キリストが私たちの友であることは、誰にも分かりやすいことですが、私たちがキリストの友であるということは、あまりよく理解されていないように思います。今まで見てきた三つの比喩、「花婿と花嫁」「羊飼いと羊」「ぶどうの木とその枝」では、一方が主であり、一方はそれに従うものでした。花婿は花嫁のかしらであり、花嫁は花婿に従います。羊飼いは羊の先頭に立ち、羊は羊飼いについていきます。ぶどうの木は、ぶどうの枝を支えており、ぶどうの枝はぶどうの木に依存しています。ところが、四番目の比喩では、キリストもクリスチャンも、どちらも「友」です。ここでは、キリストと私たちとが対等に扱われているのです。キリストは私たちの主であり、私たちはキリストのしもべであるという立場は、変わることはないのですが、キリストは、私たちをたんなるしもべとしてではなく、友として扱ってくださるというのです。「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。」というのは、キリストが私たちを、対等の愛で愛してくださっていることを示しています。

キリストの愛が対等の愛であるというのは、ヨハネ 15:13 によく表われています。キリストは「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」ヨハネ 15:13 と言

いました。「親が子ためにいのちを捨てる」や「子が親のためにいのちを捨てる」ではなく、なぜ、「友のために」なのでしょうか。今も昔も、親が子のために、子が親のために大きな犠牲を払う、夫が妻のために、妻が夫のために危険を犯してまで相手を守るということは良くあることで、そうした親子の愛や夫婦の愛は賞讃されるべきものです。しかし、親子の愛や夫婦の愛には、血縁関係や肉親の強いきずなに基づいたもので、ある意味起こりえることです。しかし、「友のために」という時には、血のつながりも何もない人のために、自分を犠牲にするわけですから、その愛は、純粋で、大きなものであるということができます。私達は、肉親の誰かが大変困っている時には、少々の犠牲を払うことができても、友人であるというだけでは、大きな犠牲を払うことをためらうのではないでしょうか。家族のことは毎日でも祈れるけれども他人のためにはなかなか毎日とまでいかないのではないでしょうか。人間の愛は、それがどんなに尊いものであっても、何かの制限や限界があるものです。しかし、キリストは、「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」とのことば通りに、キリストとは、縁もゆかりもなかった私たちを「友」として愛してくださったのです。血縁も地縁も、コネもツテも、そんなものの全くない、純粋な愛で、私たちのために命をささげてくださったのです。これ以上の愛、これ以外の対等の愛がどこにあるでしょうか。この愛によって私たちはキリストの友とされているのです。

ところで、しもべと友の違いは、いくらでもありますが、ひとつだけ挙げるとすれば、しもべは主人の思いを知らないが、友は、その友のこころを知っているということだと思います。主人は、しもべには命令を与えるだけで、決して自分の意見や感情を伝えはしません。まして、自分の悩みや秘密を打ち明けることはありません。職場でも、上司が部下に命令を下す時には、たとえその指示が良い結果をもたらす自信がなくても、それには触れないで、命令を下します。また、ビジネスの関係では、取引先に経営上の悩みを打ち明けたり、競争相手に自分が考えている経営上のアイデアを明らかにしたりはしません。そんなことをしたら、信用をなくしてしまったり、競争相手に先を越され、たちまち、ビジネスが成り立たなくなってしまいます。しかし、信頼のおける友には、これからしようとしていることや、今、どうしようかと思い悩んでいることを打ち明けます。それで、キリストも弟子たちに「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」と言われたのです。実際、キリストは、私たちに有無を言わさず命令に従わせることが出来るのに、最初の弟子たちにも、また、私たちにも、ご自分のしようとしていることを示して、私たちがそれをよく知り、納得した上で、キリストの計画に従うようにしてくださっています。神は、おひとりですべてを成し遂げることのできるお方です。主は誰にも相談する必要も、報告する必要もないお方です。そうであるにもかかわらず、神が、あえて、私たちを友と呼んで、ご自分のご計画を知らせ、その思いを伝えようとしておられるというのは、なんという大きな愛でしょうか。私たちは、神の友として何と大きな特権を与えられていることでしょうか。ただ神の思いは私たちが聖書を読んでいる時に、祈りを捧げている時に主はお語りになります。それは神様が私と語り合いたいと願っておられることでもあります。友達が私に話を聞いて欲しい時に私がすべきことは静かに友の語ることばに耳を傾けることです。神さまが、私と語り合いたいと願っておられるのに、『私は忙しいです。今は、時間がありません。そもそも私が忙しいのは元を正せばみんなあなたのためなんですよ。』などと言っていないでしょうか。神様は、私が忙しくすることよりも、神に聞き、神に語りかけることのほうを何倍も喜んでくださるのです。私たちも同じように祈りながら、神との友情を深めていきたいと思います。キリストは今日も「私はあなたを友と呼びます」と語って下さっています。